

阿佐田哲也さんは嫌な顔ひとつせず「テンホウ 大勝利 阿佐田哲也 岡部耕大さんへ 55・7・2 アンダンテにて」と書いてくれた。わたしはまだ名乗っていなかった。阿佐田さんはわたしを知ってくれていたのである。さすがは「雀聖」である。岸田戯曲賞をもらったばかりではなかったか。そのコーナーはいまも額に入れて飾つてある。

ゴールデン街ではいろいろな著名人に会ったが、阿佐田さんほど緊張した人はいなかった。ゆるりとしている。構えがなくて殺気がない。「麻雀放浪記」では主人公の坊や哲が女に「臆病ね」とからかわれる。「ああ。だがね、博打は結局、臆病な奴でなければ勝てないんだ」。こ

れに似た人物をどこかで知っているような気がした。

# 武蔵も臆病だった

ある日、麻雀を打ちながら「あつ」と思った。宮本武蔵だ。一乗寺下り松の決闘、巖流島の決闘。宮本武蔵も臆病者であった。「なんですか」と風間杜夫が聞いた。だから、阿佐田哲也は

宮本武蔵なんだよ。「また、またあ」と大竹まことがいった。大竹まことはわたしが阿佐田さんと会ったことも信じなかった。うたぐり深い奴だ。だが、テレビでの大竹まことのうたぐりは当たっているケースが多

季語がないが、山頭火は秋季の語であると勝手に決めている。俳人種田山頭火は山口県防府の大地主の家に生まれた。父が愛人を持ち、芸者遊びに夢中になり、これに苦しんだ母は井戸に身を投げた。熊本の元妻の家に居候をした山頭火は、市電の前

あの頃の仲間が4人そろつてはないのかもしれない。「アンダンテ」というバーは、まだゴールデン街にあるのだろうか。遠くなってしまった。

「この海をおまえも見たか山頭火」遊園。これは松浦の海を見ながらひねつた俳句である。

に立ちただかつて急停車させる事件を起こす。生活苦による自殺未遂といわれている。「分け入つても分け入つても青い山」。法衣と笠をまとい鉄鉢を持って放浪する山頭火。行乞である。「焼き捨てて日記の灰のこれだけか」。山頭火の酒豪ぶり

は半端ではなかったらしい。泥酔への過程は「まず、ほろほろ、それから、ふらふら、そして、ぐでぐで、ごろごろ、ぼろぼろ、どろどろ」。どんな肝臓をしているのか。「肉体に酒、心に句、酒は肉体の句で、句は心の酒だ」とも語っている。「笠にとんぼをとまらせてあるく」「墓がならんでそこまで波が押し寄せ」

わたし叔父の勝山祝賀二郎も俳句をやっていた。「シユカジロウ」と読む。茶歩が俳号であった。「チャボヤ」といつて叱られた。「サホ」と読むそうである。叔父は旧満州へ渡り「満鉄」に勤めていたのとアカシアの大連の風景が自慢であった。特急「あじあ」の話もよくしていた。(松浦市出身)